

## 地球温暖化と自然再生ボランティア活動\*

### *Global Warming and Natural Reproduction*

#### *Volunteer Activity*

岩崎行伸\*\*

我々は、自然界を生活の主な場としている。自然界から多くの有用資源を取り出しながら日々の生活社会水準を発展させてきた。大昔、弓矢で野鳥・魚や獣を狩り、木や草の実を集めていた時代はともかくとして、農耕・漁労等が行われるようになると、人々は自身の都合のよいように自然界を改良してきた。それでも、人口が少なく、技術も発達しないうちに自然界に与える影響は、それほど大きくはなかった。

産業革命後、工業や交通手段がしだいに発展し、大型の機械器具が使われるようになると、自然界に手を加える開発の規模とスピードがそれまでとは比較にならないほど大きくしかも速くなった。そのことにより経済は全面的に発展し、日常の暮らしは格段豊かになったが、その結果人口が増大し、自然界に対する働きかけをますます強化することになった(写真1.)。



図1. 背戸/裏山の夕日景観(清水/馬走)

20世紀の末、「失われた10年」・「混迷の10年」と言われた言葉がしきりに使われるようになった。前者は、バブル崩壊後の立て直しと市場のグローバル化への対応に立ち往生する日本経済の状態と、後者は、将来への指針と方向性を民の前に明瞭に示し得ない政治機能の不全状況を指した言葉である。

そして、21世紀に入ってもなお先行きは不透明であり、多くの民は不安感・閉塞感の中に漂っているように見える。大人社会が、子供・若者一般に対して、寛容性を失いつつ苛立ちを覚え、その結果「奉仕活動の義務化」に対して賛同者が少なくないのも、その現われの一つかも知れない。

昨今、さまざまな崩壊・軋み現象は、社会システム、価値システム等の転換期に特有のものであり、次なるステップに向けた試行錯誤の結果と言えるであろう。

現代型ボランティア活動の基本理念は、自主・無償・非営利・先駆性等々に位置づけられている。そのボランティアは、1990年代に大きなステップを踏み出した。阪神・淡路大震災（1995）の際の「大量自然発生的現象」とそれが引き金となって、NPO法（非営利）の施行、さらには、2004年の、台風災害・新潟県中越大地震、2006年異常気象、2007年大暖冬と能登半島地震等に対する公公民ぐるみの支援・後援活動の盛り上りが注目される。

地球温暖化は人為起源の温室効果ガスの増加によってもたらされた可能性がかなりあるという。人類が人為的に二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）の排出により、地球環境は一気に温暖化し、北極や南極大陸の氷が融け、海面も大きく上昇しつつあるという。果たして、何時ごろ日本沈没となるか？ 危機/危惧すべきことが地球環境規模で生じている。世界各地の気温変動データ（NASA/ゴダド宇宙研究所）が公表している年平均気温（世界・東京）について図2.3.に示す。

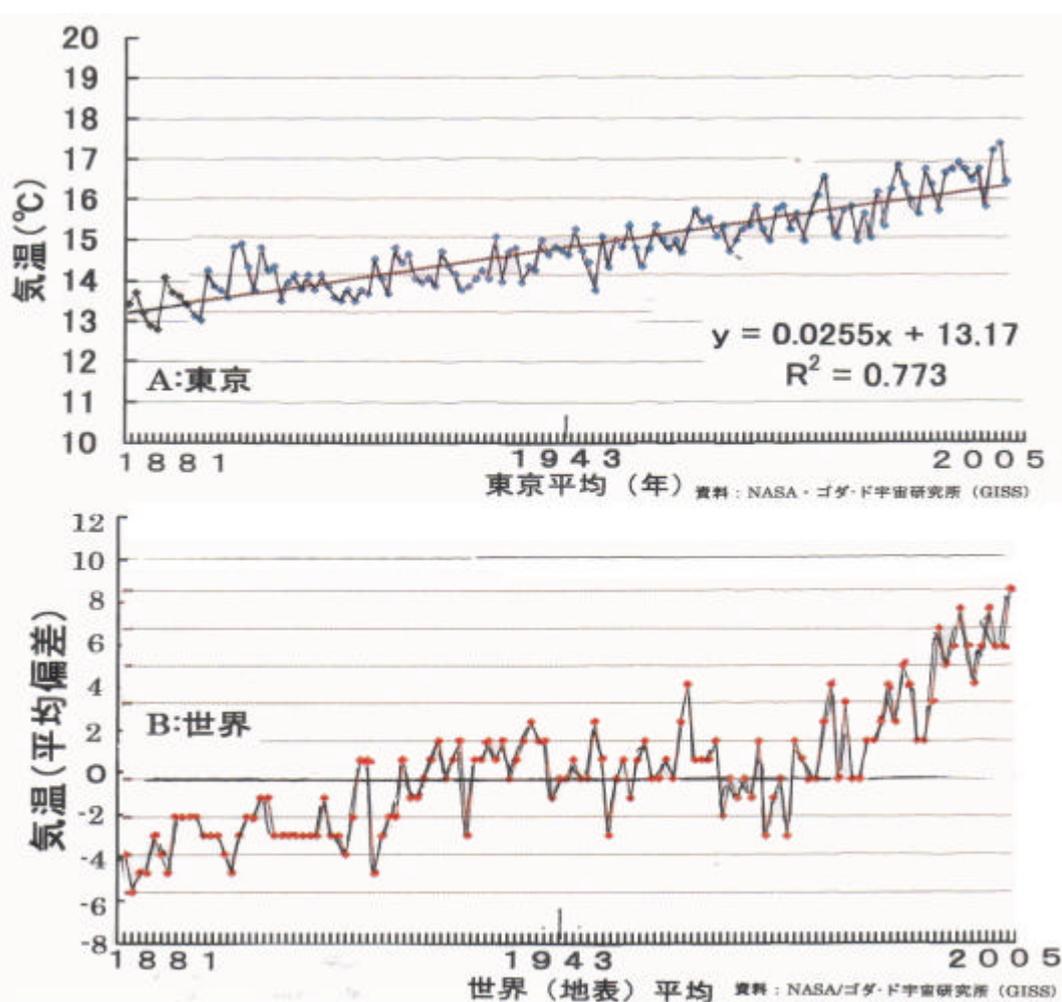


図2. 地球温暖化傾向 (A:東京平均(年)気温、B:世界平均(地表)気温)

これらの図によると、細かい気温変動はあるものの1900年代から1940年頃まで平均気温は上昇し続け、40年間で略0.4 上昇している。1970年頃までは、降傾向で30年間で0.2 低下その後、上昇し現在(2005)まで35年間で0.5 超温暖化している。その影響は実感し難いものであるが、目に見える変化としてヒマラヤやキリマンジャロの氷河の後退、大型ハリケンの襲来等の変化が起っており、「不可逆的な影響」を引き起こす危険傾

域に入っている？海の水産・漁業関係では、回遊魚の回遊経路の変化、養殖への影響等をあげて、適応策の検討が必要とされている。

自然環境への関心が高まりつつある今日、民の活動も活発化している印象があるが、自然・環境に関わる活動とは何だろう？「自然・環境ボランティア」という言葉も使われてきているが、自然環境を社会的ニーズに対応した復元・再生・保全・保護・維持する各種の支援活動を目指している。

「自然・再生ボランティア」を、環境保全を目的として善意から自主的な活動を行う人を表わしている。民が解決すべき種々な私生活に関わる課題としては、「文化・芸術に係わる技術的遺産や里山景観・水棲環境保全・野生の生き物たちの保護・育成等々、実に多種多様にわたる諸分野に及ぶ活動である。

今時代は、経済志向社会から文化志向・人間中心社会へと移行しつつあって、地位志向から自己・個性実現・共生社会志向へと移行期にあると思う。本質的ボランティア活動について、前述の他に重要な意味の考え方は「己が生きるための社会体験奉仕活動」として自覚・自負することを強調しておきたい。そして、「サ-クルと社会」「私と公」等について考える機運となり、「責任を共有する自然環境社会再生への創造」のための隣人として手懸りと共感・共生的財産の社会貢献、継続・維持・自己満足等となることを何時までも期待している。

#### 参考文献

- 1) ボランティア白書編集委員会(2001): (社法)日本青年奉仕協会(JYVA)
- 2) 野鳥(2007): 地球温暖化対策、日本野鳥の会、3月号/通巻708号.

#### 添付資料

写真1 . 背戸/裏山の夕日景観

写真2 . 地球温暖化傾向(A:東京平均気温、B:世界地表平均気温)

\*水棲&環境研究、\*\*新海洋科学漁技研、会員：日本水産学会・水産海洋学会

---